

教育における「猥褻」さ

秦野伸介（龍谷大学非常勤）

言説の逆説

教育現場の中で語られる語りは、語られている内容自体のもっともさ、あたりまえさに反して、空疎な、いかがわしい印象を醸すことがある。「いじめ問題」「差別問題」、こうしたテーマを扱う教育的な語りが空々しく響き、逆の「本音」を生み出すということが日常的に起こっている。この教育的言説の持つ構造的いかがわしさがここでの主題となる。

言説の反復

教育とは、その本質において「正しさ」を志向するものである。それをあえて冗長に言い直せば、粗野なもの・猥雑なもの・未制御なもの・カオスなもの一仮に非言説的なものとも呼んでおこう一を＊対象＊とし、それを構造化され、可視的な「正しき」学校的言説に回収する営みである、ということだ。

このことは生徒の側から見れば、二つの意味付けがなされているということになる。規範的な側面から見れば、生徒は己の持つ非言説性は抑圧されるべきものであって、言説的な存在であれ、と呼びかけられているということになる。しかし逆にまたそれは、生徒は実存的には非言説性を帯びた存在であることが前提とされているということでもある。こうした生徒の二重性は、教師－生徒関係において、双方の立場において、利用される資源となる。

教師は己の立場の確立－生徒との差異化の根拠一を、己を言説的な存在に限定することによって獲得しうる。生徒に対して言説的な存在であれと要求することが重要なものであって、それが実際に達成される必要はない。そしてまた教師は己の持つ非言説的なものを表出する必要がないし、また表出されてはならない。

学校的言説は、まずもって教師が言説的存在であることを要求し、またそれでもって完結しようとするのである。

一方、生徒にとっては、それは「本音」と「建前」の使い分けとして利用される。学校・教師に対してポジティブに振舞おうとすれば、生徒は言説的なふるまいをしようとするだろう。それは可視的なものであるだけに、比較的容易に反復可能なのであって、非言説的なものとは無関係に達成しうるのである。こうして生徒の非言説的なものは「本音」として温存される。そして逆にこれが、生徒が学校・教師に対してネガティブに振舞わんとするときの「悪しき」言説を生産するときの資源となる。ただし「本音」が「悪しき」言説を生産するのではなくて、「悪しき」言説が「本音」の位置をしめるということである。生徒は「正しき」言説を参照するだけで、己の規範的な態度と「本音」の両者を直ちに生産できるということなのだ。

このように教師と生徒は各々「正しき」言説を巡って双方の立場を再認し、学校的言説が再生産されることになる。生徒の「本音」に依拠した振る舞いは学校的言説の反復に過ぎないのである。

言説の構造

にもかかわらず、現実には学校的言説は常に何かを恐れつづける。いったい何が言説を挑発しているのか。そして教師はいかにこの言説を守ろうとするのか。言い換えるなら、言説は何をめぐるて生産されているのか。

その現象レベルの典型的な事例としてかつて問題化された「校則」問題が挙げられるだろう。一歩離れた立場から見れば、全く馬鹿馬鹿しくも見える細かな校則を決め、それを生徒に守らせることに執着する。それはすぐれて症候的な振る舞いであった。

もちろんこうした振る舞いには現実的な根拠があったと見なければならぬ。この現象において教師が恐れたもの、あるいは守ろうとしたものの中に、学校的言説を解体させよう何物かが確かに潜んでいたのではなかったか。

ここで特に校則において何が標的とされたのかを確認しておく必要があるだろう。髪型、髪の色、服装、とりわけ女子生徒のスカートの丈、男女関係、厳しすぎると批判された校則の中にはこうした「性」に関わる項目が少なくない。しかしまた「なぜそんな校則があるの?」という問いに対する教師の与える回答は多くの場合何処かしらあいまいなままである。「規則なんだから守りなさい」という多くの教師が繰り返すであろう「回答」が何の回答にもなっていないトートロジーであることに、当の教師自身も気づかないはずがない。にもかかわらずかれらはそうした「回答」を反復しつつける。

「何か」を語りながらその「何か」をはぐらかしつつけるこの言説は、構造的に脱中心化し、内部に空白を抱え込むことになる。教師は生徒を言説の*対象*としようとするが、生徒は容易にそこから逃れられる。こうした言説の「ゲーム」において、言説は空白に主体を誘い込もうと呼びかけるが、この言説にコミットするもの(生徒・教師)は容易に言説を反復する立場に身を置くことが可能なのである。

言説の中心

ここで学校的言説が制御する必要を知りながら、言説の次元で取り扱うことができないもの、それが「性」への恐れなのだ。ただしこの「性」への恐れとは、生徒が「性」化することへの恐れではない。むしろ逆で生徒を性的主体として、非言説的な存在として、まさに教育の*対象*として取り込むことはすぐれて言説的振る舞いなのである。教師は生徒の「性」性を、言説レベルでは抑圧しつつ、さらにそれを利用することも可能である。クラブ活動などに見られる「団結」、生徒の「憧れの対象」となる教師、こうした現象は少なからず「性」的な現象である。

それでは教師のもつ「性」への恐れとは何なのか。それは生徒が性的な関心を持つことではなく、教師自らが性的な関心を持つとされることへのおそれなのである。だから教師の*対象*の位置にいる生徒は、それが性的な「欲望の対象」となる可能性を排除すべく徹底的に非性的なみかけをしていなければならない。ここにこそとりわけスカートのすその長さに関する教師の「過剰」な取り組み、校則をめぐる教師のトートロジカルな物言

いの根拠が存在しているのだ。

教師は学校においては言説的＝非性的な存在でなければならない。これは外的な規律というのではなく、教師という立場性の問題として、そうなのだ。もちろん個人のレベルでは生徒を「性の対象」として見る教師がいることは当然ありうべきことなのだが、「職業人」として、かれらは「性的主体」から脱さなければならない。「そうでなければ<私>は教師ではない」。一方で、生徒から「性(エロス)の対象」としてみられることは厭わない、あるいはうまく利用してもそれはかまわない。エロ教師であっては困るが、「エロスの対象」たるカリスマ教師であることはむしろ喜ばしいことなのだ。

つまり学校の守るべき規範にとってもっとも脅威なのが、教師が性的な主体とされてしまうという事態なのである。このことは、教師と生徒の立場が最も効果的に逆転する場面の一つを思い起こせば納得できるだろう。それは教師－生徒の一对一の指導中に、生徒が突然「先生にセクハラされた」と叫ぶ場面である。

言説の猥褻さ

生徒も教師も言説の中心にすることを拒絶しつつける結果、学校的言説の中心には不在の主体(教育的素材)が呼び込まれ、見世物化され、教師・生徒はともにそれを見守り、観察する「観客」の立場をとることになる。「観客」は言説に重なり、*対象*に呼びかけつつけることになる。

中心を取り囲み、そこに常に何かを引き入れつつ、それに対して視線を集中させ、問を投げかける。自らが同じ問を投げかけられることを拒絶しつつ、また拒絶するがゆえに、そうするのである。

「(私はともかく)かれらはどうなのだ」。

「かれらは何を求めているのか」。

「かれらの欲望するものは何か」。

こうした呼びかけそのものがいかかわしいものであり、既に構造的に「性」的なものを含みこんでいるのである。

E-mail: shatano@js4.so-net.ne.jp

URL: <http://www009.upp.so-net.ne.jp/althusser/>